

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	12-024	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
<p>A brief intervention reduces hazardous and harmful drinking in emergency department patients</p> <p>救急外来受診者への短期介入により有害な飲酒が減少するか</p>		
執筆者		
D'Onofrio G, Fiellin DA, Pantalon MV, Chawarski MC, Owens PH, Degutis LC, Busch SH, Bernstein SL, O'Connor PG		
掲載誌		
Ann Emerg Med. 2012 Aug;60(2):181-92.		
キーワード		
救急外来、飲酒量、短期介入、面接指導		
要 旨		
<p>目的：</p> <p>救急外来受診者に短期介入を行うことで、飲酒量が減少し、有害な飲酒者習慣が改善されるか研究する。①救急外来担当者が面接指導を行なった群（面接群）、面接指導と1カ月後に電話介入をした群（面接電話群）、通常の指導を行った群（通常群）の3群を比較し飲酒量減少効果があるか、②通常群のうち追跡調査を行った群と追跡調査を行わなかった群で飲酒に関する違いがあるか調べた。</p> <p>方法：</p> <p>救急外来受診者からアルコール依存者889名をランダム抽出した。面接群297名、面接電話群295名、通常群148名、計740名を追跡調査の対象とした。追跡調査による飲酒量の変化を知るために、通常の指導を行い1年後の評価まで介入しない149名の群を設定した。6か月、12か月後の過去7日間の飲酒量、過去28日間の過剰飲酒回数を主要評価項目とした。また、電話調査から得られた不健康な行動（飲酒運転、交通事故、逮捕など）を副次評価項目とした。</p> <p>結果：</p> <p>ベースライン時、6か月、12か月後の7日間の飲酒量は、通常群で20.9杯、14.2杯、19.8杯であったのに対し、面接電話群で20.4杯、11.6杯、13.0杯、面接群で19.8杯、12.7杯、14.3杯であり、通常群より面接電話群、面接群に有意に効果があった。28日間の過剰飲酒回数は通常群では7.2回、5.7回、5.8回であったのに対し、面接電話群で減少効果が大きく、7.5回、4.4回、4.7回であり、面接群で7.2回、4.8回、5.1回であった。面接電話群は面接群に比べて有意差はなかった。通常の指導を行い追跡調査した群と追跡調査をしなかった群の2群には違いはなかった。3杯以上飲んだ後に飲酒運転をした割合はベースライン時と12か月後でそれぞれ、面接群で38%から29%へ、面接電話群で39%から31%へ減少したのに対し、通常群では43%から42%で変わらなかった。</p> <p>結論：</p> <p>救急外来担当者が行う短期介入は、アルコール依存者において飲酒量と飲酒運転を減らす効果があった。本研究により救急外来における短期介入の有効性が示唆された。</p>		